

色紙に書く 座右の銘

渡辺 利夫

「公に生きる」



渡辺利夫（わたなべ りくお）
拓殖大学総長。1939年（昭和14）山梨県生まれ。慶應義塾大学卒業。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授を経て現職。第17期学術会議会員、アジア政経学会理事長（元）外務大臣表彰。正論大賞。
著書は「成長のアジア 停滞のアジア」（吉野作造賞）、「開発経済学」（大平正芳記念賞）、「西太平洋の時代」（アジア・太平洋賞大賞）、「神経症の時代」（開高健賞正賞）、「アジアを救った近代日本史講義」（PHP研究所）、「放哉と山頭火―死を生きる」（ちくま文庫）など。

今春、松山市の秋山好古・真之兄弟の生家を訪れる機会があった。兄の好古は、日本

の陸軍に初めて騎兵隊を導入、騎兵に機関銃を常備させ、敵騎兵隊には拠点式陣地をもって抗する戦術を編み出し、日露戦争時に世界最強のコサック騎兵隊を撃破、奉天会戦の勝利に寄与した明治の名将である。弟の真之は、連合艦隊作戦参謀としてバルチック艦隊に抗する丁字戦法や旅順港閉塞作戦などを起案し、司令官東郷平八郎をして「智謀湧くが如し」といわしめた、

これも明治を象徴する伶俐なる軍人であった。

好古は真之に長じること一〇歳であったが、死去は真之の方が一二年も早かった。五〇を少し越えたところで死んだ真之の葬儀に臨んだ好古は、次のように追悼の辞を述べた。「兄として弟の死はただ悲しいだけだ、それに真之には誇るべきものは何もない。しかし、ただ一つ、私から皆様に申し上げておきたいのは、真之はたとえ秒分の片時でも、『お国のため』という観念を

捨てなかった。四六時ちゅうこの観念を頭から離さなかったということです。このことだけははつきりと、兄としていいうることです」

「公」のためだけに生きた真之を、好古はどんなにか尊い人生だったかと誇りたかつたのであろう。一教員としての私の胸中につねにあるのは、若者たちに、公に生きることよって今生きて在ることの晴れがましさを少しでも実感させたいという思いである。

私は学生に、アジアの貧困国での現地体験を在学中に少なくとも一度はさせ、これを単位化することを試みてきた。フィリピンの信頼できる現地NGOと組んでホーム

ステイさせ、NGOの指導の下でストリートチルドレンの救済活動に参加させたり、スモークーマウンテンと呼ばれる巨大なゴミの山で空き缶やビニール袋を拾ってこれ

を生計の糧にしている子供たちが、麻薬など悪の道に迷い込まないように子供会を組織し、そのためのお世話をさせる。そういった活動に一月ほど携わり、帰国した彼等の顔には、自分以外のことには何かの貢献ができたのだという晴れがましさが見えかかっている。インドネシアの姉妹校と協働して、その姉妹校に隣接する貧困地域の開発に、両校の教員と学生の参加を得て、自治会の組織づくりに精出させたりもした。

東日本大震災からもう四年以上が経つ。この間、拓殖大学の学生は、岩手県釜石市を中心に救援ボランティア活動を展開してきた。活動はいまもつづいている。その活動が釜石市民から評価を受け、釜石市と拓殖大学との間で「災害復興へ向けての支援協定」が結ばれている。こういう活動のリーダー達は、フィリピンやインドネシアの現地で活動した学生の中から生まれた。一〇〇人の学生を指導すれば、その内の二〇人ほどがこのようにして育っていくことを、私は経験的に知っている。

教師冥利に尽きるとは、学生がこうして成長していく姿を目にする時である。

公に
生かされる

渡辺利夫

196ページに色紙プレゼントの応募要領が載っています。